一人の昼食

遥　弥生

しかし、そんなことはありえない、と思いなおす。

全くの夢想だ。昼間だというのにあまりに暑いから、ついぼうっとしてしまったんだろうと首を横に振って頭を冷やした。やめだ、やめ。全部焦がしちまうほどの料理下手のおっさんには自炊など百年早い、昼食は冷蔵庫のもので適当に済ませよう。

そうだ、この酷い臭いをどうにかするためにも、空気を入れ替えた方が良い。じめじめとした部屋で、一人閉め切って過ごしているから朦朧とするのだ。

つかつかとキッチンを離れてリビングルームの方に向かうと、こんな時間からなぜか電灯が点けっぱなしになっていた。今は一人だから問題ないが、妻がいたら大いに叱られるところだ。テーブルのリモコンを拾い上げて消灯する。それから慌ただしく窓を全開にすると、鈴虫の声と共に、冷たくさわやかな空気が庭から運ばれてきて、たちまち部屋の中に漂う嫌な臭いが和らいだ。

なかなか良い雰囲気じゃないか。こうなると煙草も欲しくなってくる。換気扇をつけないと妻に怒られそうだが、今は一人。気にすることはない。それに、しばらくキッチンに近づきたくなかった。九十度向きを変えて、まっすぐ書斎に向かう。

煙草を取って戻ってくると、空気はだいぶマシになっていた。が、まだキッチンの方からは強烈な臭いがしており、鼻をつまんで顔をしかめる。やはり換気扇を付けるべきだったかとも思ったが、今は気にしないことだ。ともかく一服。

窓際にどかりと座り込んで、ふうっと煙を吐き出す。さっきまでかなり参っていた嗅覚はフレーバーによって何とか誤魔化され、暑さのせいで乱れた呼吸も落ち着いてゆく。一人で過ごすこんな昼下がりも悪くない。時折聴こえてくるカラスの鳴声が興趣を添える。

冷凍庫にチンして食べるパスタが入っていたはずだから、あとであれを食おう。やや遅めの昼食だから、それほどたらふく平らげなくてもいいだろう。

ふと目を動かすと、開け放した窓硝子についた赤い点が目に入った。

汚れだとしたら嫌な色だ。しかし、光の当たり具合によって微妙に色が変わる。

まあ、庭のどこかに咲いている花の色でも反射しているのだろう。もしくは目の方が少々疲れているか。ディスプレイばかり見ているとそういうことが起きるのだと何かの記事で読んだことがある。今は一人だからどうしようもないが、妻が戻ってきたら相談してみようと思いなおし、窓際に背を向けた。

煙草をもみ消すと、部屋の中の臭いはさっきより酷くなっていた。だいぶ放置してしまったせいだろうか。そろそろ換気扇も付けた方が良いかもしれない。

が、それよりも昼食だ。予想外の失敗に時間をとられてしまったが、多少遅くなってもそんなに問題はなかろう。ともかく一人だから一人分調達すればいいのだし、チンするだけだから大した手間ではない。

一瞬だけ背後に目を向けると、部屋の外では、少し前まで橙色だった空は紫、そして深い青色に変わりつつあった。空の色が落ち着いてゆくのは結構なことだが、もう秋になったせいか陽が沈むのが早い。参ったなア、こっちは昼食もまだ食ってないのにと頭を掻きむしる。

しだいに寒くなってきた。さっさと窓を閉め、電気を点ける。

どっこらせと言いながら、窓ガラスを背にして立ち上がり、煙草をテーブルの上に置いてキッチンの方に向か

う。妻がいたら怒られそうなものだが、今は一人だ。臭いはどんどんひどくなっている気がする。
キッチンの入り口近くにある冷蔵庫の二段目を開けて冷凍のスパゲッティを取り出す。一人前だが昼食にはちょうどいい量だ。あらかじめ味付けもされているから、料理下手には気楽でいい。トマトソースとカルボナーラが入っていたが、迷わずカルボナーラを取り出す。鼻をつまみながら片手だけで無理やり外袋をむしり取って電子レンジに近づいてゆくと、足に触るものがあった。

「うえっ」

感触に驚いて地面に目を落とす。
初めは盛大に醤油でもこぼしたのだろうかと思った。
しかし、それよりはるかにどろどろした池には、突っ伏した女の身体が浮かんでいた。
背中から包丁の柄を三本も生やした背中にくっついているのは、見慣れた髪型の頭部だ。
がさっ、と音がして、足の上に凍ったスパゲッティが降ってくる。昼食は横たわる妻の上を二、三度跳ねて、変色した血液に着水した。

あまりにも唐突に目の前に飛び込んできた惨状に、咄嗟に背中を向ける。
深呼吸を一、二度して、しかし、そんなことはありえない、と思いなおす。
全くの夢想だ。昼間だというのにあまりに暑いから、ついぼうっとしてしまったんだろうと首を横に振って頭を冷やした。やめだ、やめ。全部焦がしちまうほどの料理下手のおっさんには自炊など百年早い、昼食は冷蔵庫のもので適当に済ませよう。